Architectural Institute of Japan

U.D.C. 72.03 : 728.03

日本建築学会論文報告集
第274号・昭和53年12月

近世公家住宅における数寄屋風書院について

その 1.——院御所について——

正会員 北野 隆*

はじめに

本論文は，近世住宅における数寄屋風書院に関する研究の一部であり，先の「近世武家住宅における数寄屋風書院について」[*1] に続くものである。そこで時代範囲を数寄屋風書院の要素が現われ始めると考えられる慶長期（1600 年頃）より，各要素が出尽くすと考えられる宝永期（1700 年頃）迄とする。この様に時代を限定すると，御所関係では禁裏には数寄屋風書院は見られず，本稿では院御所について取扱い，主に殿舎構成と数寄屋風書院との関係，又数寄屋風書院の平面の特徴ならびにその機能について考察するものである。なお史料は主に宮内庁書陵部蔵の内匠寮本を使用している。

1. 院御所における殿舎構成と数寄屋風書院について

慶長度後陽成院御所から延宝度二次の東福門院御所まで十四屋敷の主要殿舎についてまとめたものが表—1 であり，それを平面に表わしたものが図—1 である。すでに院御所の殿舎構成については，平井聖博士[*2]により基本的な構成として，広御所—小御所—書院—常御殿であった事が述べられている。更にこの基本的な構成をもとに御所の規模の大小，格式の上下などによって殿舎の省略が行なわれている。表—1，図—1 の十四の院御所の殿舎構成は，広御所—小御所—書院—常御殿，広御所—書院—常御殿それに広御所—常御殿の三種に分けられる。

表—1

御所名	年度	殿舎構成
後陽成院御所	慶長	対面所 御会御殿 二階書院 小書院 常御殿
後水尾院御所	寛永	広御所 小御所 書院 常御殿
東福門院御所	寛永	対面所 内々対面所 常御殿
明正院御所	寛永	対面所 書院 常御殿
後水尾院御所	寛文	広御所 書院 常御殿
東福門院御所	寛文	対面所 内々対面所 常御殿
明正院御所	寛文	対面所 書院 常御殿
後西院御所	寛文	広御所 小御所 学問所 常御殿
後水尾院御所	延宝1次	広御所 常御殿
東福門院御所	延宝1次	対面所 休息所 常御殿
明正院御所	延宝	対面所 御幸之間 常御殿
後西院御所	延宝	広御所 書院 常御殿
後水尾院御所	延宝2次	広御所 常御殿
東福門院御所	延宝2次	対面所 奥対面所 常御殿

（1） 広御所—小御所—書院—常御殿

この殿舎構成には入る院御所は，慶長度後陽成院御所，寛永度後水尾院御所，それに寛文度後西院御所である。但し，この内慶長度後陽成院御所では広御所に相当する殿舎として対面所，寛文度後西院御所では書院に相当する殿舎として学問所が存在していた。

これらの院御所の内，数寄屋風書院の要素が見られる殿舎は，寛永度後水尾院御所の書院である。（図—2）寛永度後水尾院御所は寛永五年（1628）二月より作事が始められ[*3]，寛永七年（1630）十二月に竣工した[*4]。指図[*5]に描かれる寛永度後水尾院御所の各殿舎は仕様的な記載は見られず，平面の線だけが描かれている。しかしこの書院については「隔蓂記」の寛永十三年（1635）九月十八日の項と明暦二年（1656）十一月十八日の項によって内部の座敷飾等が判明する。それによると

「……茶堂勧修寺中納言，御書院，御茶屋方々御飾，驚凡眼者也。御書院之書院床畳床違棚之飾之模様，池坊来飾之也。図略大形如此。三幅一対者牧渓筆欤。中者寒山拾得，両脇龍虎。三具足三頭共ニ銀子也。奥之御書院之棚ニ有冠棚，色々被飾也。大棚ニ有金子之大香炉，有御古筆。」

と記され，この他一間半の書院床，違棚の飾の図が描かれている。又明暦二年十一月十八日の項によると

於仙洞……（中略）……御茶御振舞被下也。於御書院，御振舞御料理被下也。御茶者奥之御床間，道沖之墨跡布袋之賛御掛物也。御茶済，各御庭歩行見物。

と記されている。

これらの記録によると，主室には書院床，畳床，違棚が設けられ，池坊によって飾が行なわれた事がわかる。更に奥の書院には冠棚，又大棚も存在していた。この他明暦二年十一月十八日の項より奥の床間の部屋が見られる。

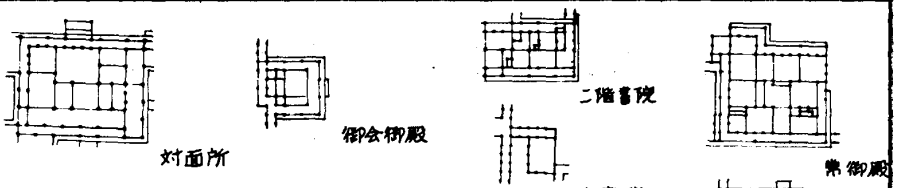
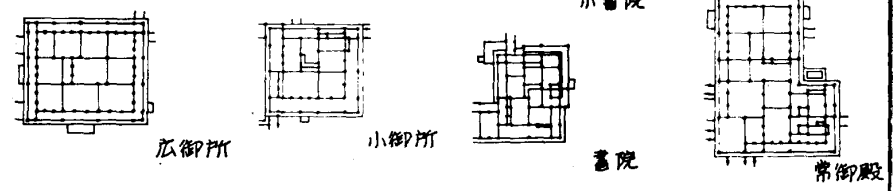
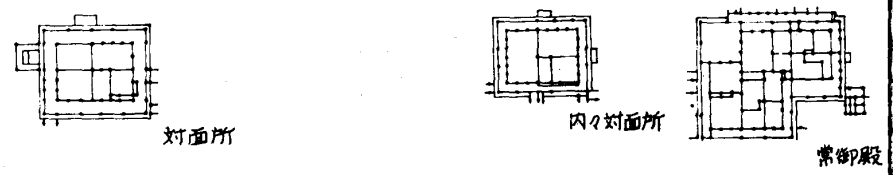
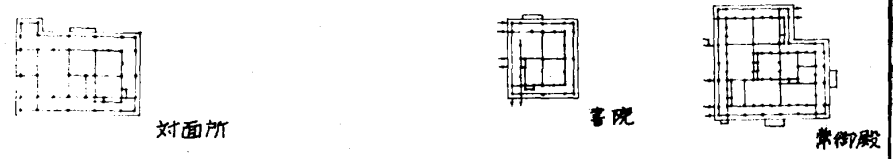
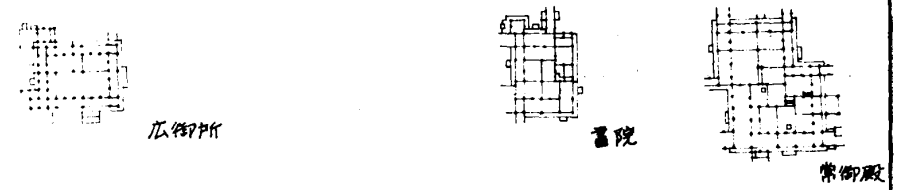
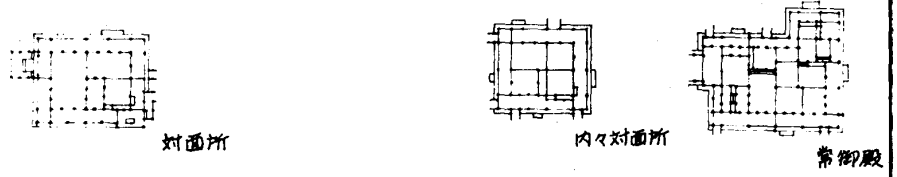
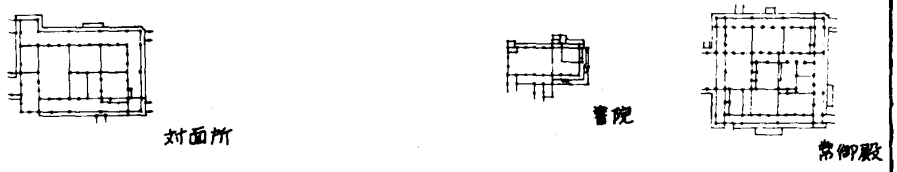
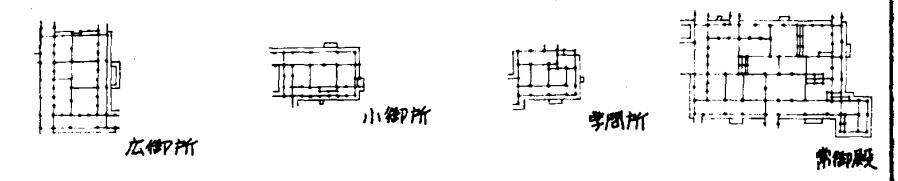
これらの資料をもとに指図に示される書院を考察すると，主室には隅上段，畳床，違棚，書院床が設けられ，その南の部屋の一間半の座敷飾は「隔蓂記」に図示されに書院床に，その西の部屋は「隔蓂記」に記される奥書院と思われ，鉤形の座敷飾は冠棚，大棚と予想される。

* 熊本大学 講師

（昭和52年12月16日本稿受理・討論期限昭和54年3月末日）

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

御所名	年度	殿舎構成
後陽成院御所	慶長	
後水尾院御所	寛永	
東福門院御所	寛永	
明正院御所	寛永	
後水尾院御所	寛文	
東福門院御所	寛文	
明正院御所	寛文	
後西院御所	寛文	
後水尾院御所	延宝1次	

図—1-(1)

更にその北の部屋は「隔冀記」に記される奥の床間と思われ，二間×半間の座敷飾は床と考えられる。

この様に寛永度後水尾院御所の書院では座敷飾において通常の書院造に比べ，各部屋に数多く設けられ，又自由な配置になっており，数寄屋風書院の要素が見られる。

（2） 広御所—書院—常御殿

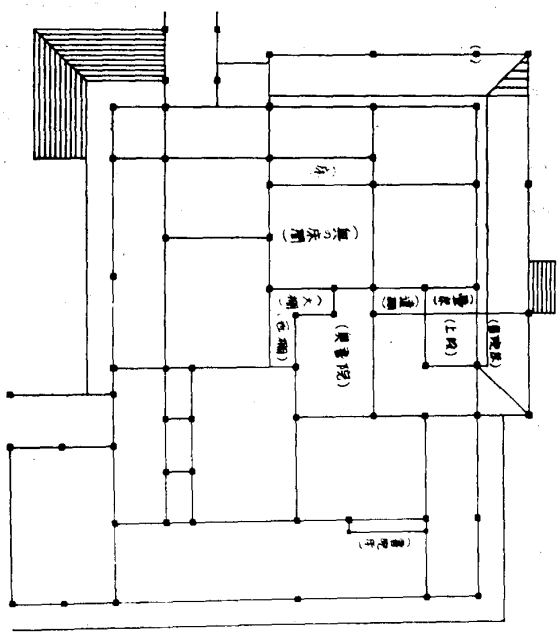
この殿舎構成には入る院御所は寛永度東福門院御所，

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

御所名	年度	殿舎構成
東福門院御所	延宝1次	対面所　休息所　常御殿
明正院御所	延宝	対面所　御寝之間　常御殿
後西院御所	延宝	広御所　書院　常御殿
後水尾院御所	延宝2次	広御所　常御殿
東福門院御所	延宝2次	対面所　奥対面所　常御殿

図—1-(2)



図—2　寛永度後水尾院御所書院

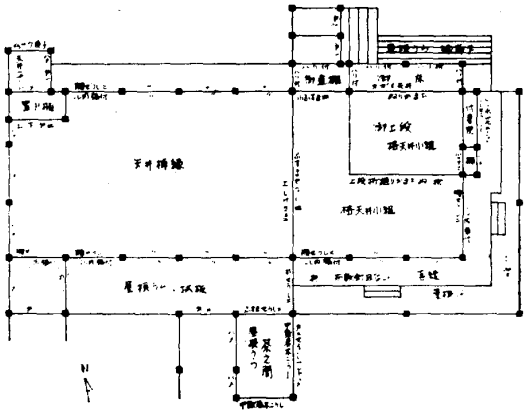
寛永度明正院御所，寛文度後水尾院御所，寛文度東福門院御所，寛文度明正院御所，延宝度一次東福門院御所，延宝度明正院御所，延宝度後西院御所，延宝度二次東福門院御所，である。これらの院御所の内，寛永度東福門院御所寛永度明正院御所，寛文度東福門院御所，寛文度明正院御所，延宝度一次東福門院御所，延宝度二次東福門院御所では広御所に相当する殿舎として対面所が，又寛永度東福門院御所，寛文度東福門院御所，延宝度一次東福門院御所，延宝度二次東福門院御所では書院に相当する殿舎として内々対面所，休息所，奥対面所が存在していた。

広御所—書院—常御殿の殿舎構成になる院御所の内，数寄屋風書院の要素を確認出来る殿舎は，寛文度明正院御所の書院，延宝度一次東福門院御所の休息所，それに延宝度二次の東福門院御所の奥対面所である。

寛文度明正院御所は，先の寛永度造営の御所が万治四年（1664）一月十五日の二条邸より発した火により，文庫，蔵各一棟を残して全焼する*6。そこで寛文二年(1665)四月二十一日釿始めが行なわれ，同年十月十九日上棟，同年十一月四日，明正院は新造なった御所に移徙が行なわれている。この期の書院なる殿舎は主室と次の間からなっていた*7。（図—3）主室は三間×三間の広さで，東北隅に六畳の隅上段が設けられ，隅上段の東側には櫛形花欄間付の間口一間の付書院と半間の棚が配され，北側には間口二間の床，又下段には違棚が配されていた。更に主室の東から南にかけては，広縁は設けられず直接半間の落縁になり，大きく土庇が廻っていた。又主室の天

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

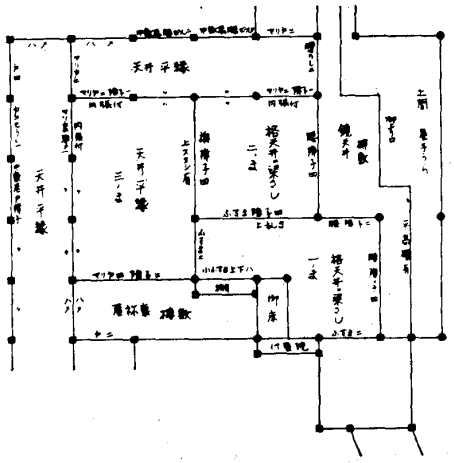


図—3　寛永度明正院御所書院

井は上段，下段共に格天井小組，建具は外部とは腰障子，次の間境は襖障子で仕切られ，欄間はしげさまになっていた。次の間は三間×五間の広さで北西部に置戸棚が設けられ，建具は外部と腰障子になり，天井は棹縁天井，南側一間縁が化粧屋根裏になっていた。

この様に寛文度明正院御所における書院は，主室の座敷飾の自由な配置，又広縁を設けず直接落縁を設け，大きく土庇が取られる等数寄屋風書院の要素を数多く見る事が出来る。

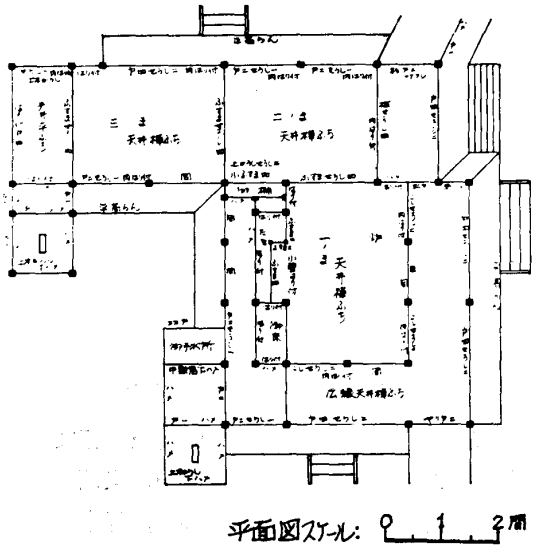
延宝度一次東福門院御所は，先の寛文度造営の殿舎が寛文十三年（1673）五月九日鷹司殿よりの出火により全焼する*8。そこで延宝元年（1673）より作事が行なわれ，延宝二年九月には移徙が行なわれている*9。この期の東福門院御所の主要殿舎は表対面所，休息所，常御殿であった*10。この内休息所の平面は主室，次の間，三の間からなっていた。*11（図—4）主室はL字形の平面で，南西隅に間口一間の畳床，付書院，棚が設けられ，これらの座敷飾は畳床を中心に付書院，棚が乙形に配されていた。又主室の天井は「格天井ニ梁さし」と記され，次の間境の欄間は「乱間とび入花有」と記されるから，曼殊院小院に見られる様な欄間だったと思われる。更に建具は外部と腰障子で，次の間とは襖障子で仕切られていた。次の間は二間×二間の広さで，天井は「格天井ニ梁さし」になり，三の間境の欄間は「スカシ有」と記されるから，すかし彫のある板欄間だったと思われる。又これら主室，次の間，三の間の東側はL形の縁が設けられ更に土庇が大きく取られていた。



図—4　延宝度次東福院御所休息所

又この東福門院御所の休息所に関しては仕様帳が存在する*12。仕様帳によると柱については「惣色付柱，杉吉野丸太有，木され丸太角柱取合，面付三寸六分」と記され，丸太柱と角柱が使われていた事がわかる。先の指図にも柱について丸と角の二種類で描かれ，指図より丸太柱は主室，次の間，それに土庇部分に使われた事がわかる。又柱太さは三寸六分で通常の書院造の柱に比べ細く，柱すべてに色付が行なわれていた。更に色付に関しては仕様帳より「四方志ころ庇，壱間拾八間色付」と記されるから庇部分にも色付が施こされていた事がわかる。屋根に関しては「梁間三間，桁行五間，南指出壱間ニ弐間，四方志ころ廂壱間ニ拾八間，屋根弐分木賊葺，軒厚四寸……両妻葺詰，むくり屋根……」と記され，寄棟造，むくり屋根になっていた。

延宝度二次東福門院御所は，先の延宝二年造営になった殿舎が延宝四年十二月二十七日後水尾院御所の広御所より出火して全焼し*13，新しく造営が始まるが，延宝五年十月十一日には完成し，移徙が行なわれている*14。この時の主要殿舎は表対面所，奥対面所，常御殿からなり，この期の奥対面所が現在の修学院離宮中の茶屋として残っている*15。又当時の指図も残り*16，それによると平面は一の間，二の間，三の間からなっている。（図—5）一の間は十二畳で，いろりが切られ，北側に間口一間の畳床と一間半の違棚が設けられている。特に違棚は五段からなり，下にはL形の地袋の上に更に三角の袋棚を設ける等凝った意匠が施こされ，釘隠の意匠も花車である。この間は十畳になり，西に一間の菓子棚が設けられていた。この一の間と二の間の南から東側にかけて入側縁が廻り，更に東側は落縁になり，乱菱の高欄が設けられていた。この様に延宝度二次東福門院御所の奥対面所



図—5　延宝度次東福院御所奥対面所
注：平面図方位はすべて上が北になる

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

は，平面の構成において書院造と違い自由な配置になり，更に座敷飾の配置，意匠，釘隠，高欄の意匠に数寄屋風書院の要素が見られる。

（3） 広御所—常御殿

この殿舎構成には入るのは延宝度一次の後水尾院御所と延宝度二次の後水尾院御所である。この両院御所には数寄屋風書院の要素を備えた殿舎は見られない。

以上の様に慶長度から延宝度までの十四の院御所の殿舎構成と数寄屋風書院について考察した。その結果院御所における基本的殿舎構成，広御所—小御所—書院—常御殿の中で，書院なる殿舎に数寄屋風書院の要素を確認する事が出来る。

2. 数寄屋風書院の平面と機能について

院御所における数寄屋風書院として，寛永度後水尾院御所の書院，寛文度明正院御所の書院，延宝度一次東福門院御所の休息所，延宝度二次東福門院御所の奥対面所の四殿舎が明らかになった。これらの数寄屋風書院の平面的特徴，ならびに機能について考察する。

寛永度後水尾院御所の書院の主室には座敷飾として二畳の隅上段が設けられ，更に上段に畳床，付書院，下段には違棚が設けられているし，又各部屋に座敷飾が見られる等数多くの座敷飾に特徴が見られる。しかし室内細部については資料不足でわからない点が多い。

次の寛文度明正院御所の書院は主室と次の間からなり主室の座敷飾は六畳の隅上段が設けられ，更に上段の北側に間口二間の床，東側に間口一間の櫛形花欄間をもった付書院と棚，それに下段に違棚が設けられていた。この様に寛文度明正院御所の書院は，先の寛永度後水尾院御所の座敷飾と共通するところが数多く見られる。しかし両院御所の書院の違いは，寛永度後水尾院御所の書院では主室の外側が広縁だったのに比べ，寛文度明正院御所の書院では主室の南から東側にかけて直接落縁になり大きく土庇が廻っている事であろう。

延宝度一次東福門院御所の休息所は，一の間，二の間，三の間からなり，一の間の座敷飾は間口一間の畳床が東向きに，更にこの床を中心に南側に付書院，西側に棚が乙形に設けられていた。この様に座敷飾は数多く設けられているが，先の寛永度後水尾院御所と寛文度明正院御所の書院の座敷飾に見られた様な上段はなく，更に座敷飾も自由な構成がとられている。この延宝度一次東福門院御所の休息所は丸太柱，面皮柱が用いられ，一の間，二の間の東側は大きく土庇が廻っていた。又一の間と二の間との境の欄間は「乱間とび入花有」が設けられ，二の間と三の間との境の欄間は透し欄間であった。更に三の間の天井は平縁天井になり，庇には色付が施こされ，屋根はむくり屋根であった。この様に延宝度一次東福門院御所の休息所は，数寄屋風書院の要素がすべて現われていたと言えよう。先の寛文度明正院御所の書院では，土庇は現われていたが，柱はすべて角柱で記され，主室の天井は格天井小組になり，主室と次の間境の欄間は「しげさま」になっていた。そうすると院御所における数寄屋風書院の中で，延宝期頃になるとすべての数寄屋風書院の要素をそなえた殿舎が現われ始めたと見る事が出来る。

延宝度二次東福門院御所の奥対面所は平面の構成，主における座敷飾の配置，床，棚，釘隠の意匠等に数寄屋風書院の要素を確認出来るが，柱は角柱になり，長押が付けられていた。

次に院御所における数寄屋風書院の機能について「隔蓂記」を資料にして考察する。先に上げた院御所における数寄屋風書院の四殿舎の内，寛永度後水尾院御所の書院と寛文度明正院御所の書院の使われ方が明らかになる。寛永度後水尾院御所の書院については

寛永二十年七月二十三日の項
午後於仙洞，有御振舞，予亦被召加也。……御茶済，仙洞幷御門主達被乗御船，池上数回。（中略）於御書院御吸物出，御酒宴数返。
慶安三年十二月十一日の項
於仙洞，而有御振舞故，斉了，早々令出京也。（中略）御振舞者御書院，御茶者小御所也。
承応二年三月十二日の項
午時，於仙洞而糸桜之御花見有之也。（中略）御振舞者御書院。秉燭，於糸桜之花下而御酒宴也。後段者，於広御殿而也。
明暦二年十一月十一日の項
於仙洞，而御振舞也。（中略）御屋敷之御茶店也。御掛物，日観筆之葡萄也。御茶済，御鎮守之御火焚也。御火焚済，於御書院，而後段御振舞也。
明暦二年十一月十八日の項
於仙洞……（中略）御茶御振舞被下也。於御書院，御振舞御料理被下也。御茶者奥之御床間，道沖之墨蹟布袋之賛御掛物也。御茶済，各御庭歩行見物。於御書院，色々御菓子被下，種々御巻物古筆唐紙致拝観，各退出仕也。

又，寛文度明正院御所の書院については
寛文四年五月六日の項
今日者法皇，新院於本院御所（明正院御所）而御幸。於御書院，而先切麦出也。御相伴新院……法皇予有御双六五番，方々御殿中常御所迄，不残見物……。……則御茶屋，御庭所々不残御供仕也。御振舞亦右之衆御相伴，御茶被点。

以上の様な寛永度後水尾院御所の書院，寛文度明正院御所の書院の使われ方から察すると，書院では振舞が中心に行なわれているが，時には明暦二年十一月十八日の様に種々御巻物，古筆，唐紙等の道具拝観も行なわれていたと思われる。但し御茶は御茶屋で行なわれている場合が数多く見受けられる。

ま と め

慶長度後陽成院御所より延宝度二次の東福門院御所まで十四の院御所における殿舎構成と数寄屋風書院，数寄屋風書院の平面と機能について考察した。その結果，院御所における殿舎構成は基本的には広御所（対面所）—小

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

御所—書院（休息所，奥対面所）—常御殿であり，その内書院なる殿舎に数寄屋風書院の要素が現われる事がわかる。又これらの数寄屋風書院の平面について共通している事は，主室に座敷飾が数多く設けられ，室内意匠も延宝度二次東福門院御所の奥対面所に見られる様に華美だった事が予想される。しかし延宝度一次東福門院御所の休息所では座敷飾の自由な構成はもちろん，土庇，色付，丸太柱，平縁天井，透し彫り欄間等すべての数寄屋風書院の要素が現われていた。この様な特徴をもつ院御所の数寄屋風書院では振舞を中心に，時には道具拝観が行なわれていた。

（本報告に御教示下さいました熊本大学教授堀内清治博士，東京工大教授平井聖博士に謝意を表します。

注

（本稿の一部は「公家住宅における数寄屋風書院について」日本建築学会大会学術講演梗概集，昭和50年10月で発表した。）

*1「近世武家住宅における数寄屋風書院について—大名屋敷の殿舎構成と数寄屋風書院」「近世武家住宅における数寄屋風書院について—数寄屋風書院の平面と機能—」として日本建築学会論文報告集に投稿中（日本建築学会論文報告集，第263号予定）

*2 平井　聖博士「日本近世住宅の殿舎平面と配置に関する研究」私家版，1961.9
平井　聖博士「日本の近世住宅」鹿島出版会，昭和43年

*3 平井　聖博士編「中井家文書の研究，第一巻」中央公論美術出版，昭和51年
寛永五年二月六日幕府駒井親直および徳山直政を上方目付とし，御所造営を監せしむ。（大猷院殿御実紀）

*4 同上（*3）寛永七年十二月十一日新造御所に移御せらる。（実条公紀）

*5 同上（*3）「寛永度後水尾院御所並東福門院御所」等寛永度後水尾院御所の指図が紹介されている。

*6 同上（*3）万治四年（寛文元年）一月十五日，二条光平第より出火，延焼して，御文庫，御蔵以外全焼す，仍って岩倉御所に御幸せらる。（隔冥記）（内匠寮本）

*7 同上（*3）「寛文度明正院御所」の指図が紹介されている。

*8 寛文十三年（延宝元年）五月九日鷹司房輔第より出火，延焼して御所全焼す，仍って二条光平第に御幸す。（重房宿禰記）

*9 延宝二年九月十九日新造御所に移徙せらる。（尭恕法親王記）

*10「延宝二年女院御所様御指図」（宮内庁書陵部蔵）

*11 結城英嗣「延宝度1次造営女院御所の御休所について」日本建築学会大会学術講演梗概集，昭和50年

*12「延宝二年女院御所様御作事御造作帳仕様帳」（宮内庁書陵部蔵）

*13 延宝四年十二月二十七日法皇御所より出火，延焼して御所全焼す。仍って二条光平第に御幸，仮殿と為す。（尭恕法親王記）

*14 延宝五年十月十一日新造御所に移徙せらる。（基熙公記）

*15 森　蘊博士「修学院離宮」創元社，昭和30年
森　蘊博士「修学院離宮の復原的研究」養徳社，昭和29年
太田博太郎博士編，平井　聖博士，他「日本建築史基礎資料集成書院II（修学院離宮中御茶屋客殿）」中央公論美術出版，昭和49年

SYNOPSIS

U.D.C. 72.03 : 728.03

ON THE RUSTIC STYLE SHOIN AT THE EX-EMPEROR'S PALACE IN THE EARLY EDO-PERIOD

by **TAKASHI KITANO**, Lecturer of Kumamoto Univ.
Member of A.I.J.

It contains the discussions about

I. On the disposition of buildings and the rustic style shoin in the ex-emperor's palace

The ex-emperor's palaces had been consisted of Hiro-Gosho, Ko-Gosho, Shoin and Tsunegoten. In these buildings, the elements of the rustic style shoin appeared in Shoins.

II. On the plan and function of the rustic style shoin in the ex-emperor's palace.

At the early edo-period, the Shoin had been decorated with Toko, Tana, Tsuke-shoin and Jōdan (the upper seat). and they were used mainly for the entertainment. In about Enpou-period (A.D. 1673～1680), all the elements of the rustic style shoin appeared in these Shoins.

NII-Electronic Library Service